

MUSIC MAGAZINE

MARCH 3 1996

クインシー・ジョーンズ／来日ブルース総まくり／アトランタ／リー・ペリー／張学友

マライア・キャリーとホイットニー・ヒューストン アメリカ代表への道

ブライアン・ウィルソン 悲痛美のあなたに見える“夢”

♀ ゴールド・ツアーで見せた一貫した美学

ブラック・グレイプ ならず者ブレイク・ビーツ

MARIAH CAREY

ALBUM PICKUP

アルバム・ピックアップ

●LPと表示してあるものはアナログ・ディスク、MCと表示してあるものはカセットの番号で、表示のないものはすべてCDの番号です。曲目表はCDに合わせてあります。「アルバム・ピックアップ」「アルバム・レビュー」とも、筆者の方には主に試用テープで評をお願いしています。価格は消費税を含んだものです。



イラストレーション=JERRY

- A**
Fernanda Abreu 209
African Jazz Pioneers 212
- B**
The Band 222
Beastie Boys 229
Bloodloss 226
Jackson Browne 221
Peter Bruntnell Combination 230
- D**
The D.O.C. 238
デ・ガ・ショー 245
電気グルーヴ 240
- F**
Fun Lovin' Criminals 232
フィッシュマンズ 243
- G**
Gin Blossoms 225
- H**
黒豹 (Heibao) 217
布袋寅泰 244

- J**
Hank Jones & The Mandinkas 215
- K**
Dolores Keane 230
Kris Kross 237
- M**
Ministry 227
Van Morrison 231
- N**
Shara Nelson 234
Nightmare On Wax 239
- P**
Iggy Pop 228
- R**
Tony Rich 236
- S**
Pharoah Sanders 215
Sepultura 210
Small Circle Of Friends 241
The Subdudes 224

- サニー・デイ・サービス 242
- T**
スリル 241
鄧麗君 218
Livingston Taylor 224
- V**
Caetano Veloso 211
- W**
Brice Wassy 213
The Wedding Present 229
王菲 (Faye Wong) 216
Yada Yada featuring Mick Talbot & Chris Bangs 233
- COLLECTIONS**
『マリの音楽 1』 214
『萬歳から漫才へ・ルーツ編』 219
『デッド・マン・ウォーキング』 220
『ノット・フェイド・アウェイ〜パティ・ホリーに捧ぐ』 223
『La Haine〜憎しみ』 235
『キッズ』 227

ダ・ラータ／フェルナンダ

EMI〔東芝〕 TOCP8828

¥2500／歌詞・対訳つき／解説中原仁、対

訳国安真奈／2・21発売

①ダ・ラータ②ガール・フロム・リオ③O・K④ラ
イフ⑤ユー⑥スイング⑦ヒア⑧ドイス⑨ソモス・ウ
ン⑩S・L・A・3⑪ア・ラータ⑫バビロニア・ロ
ック⑬ダ・ラータ (Radio Version)
(原盤 ブラジルEMI 834616-2)

表ジャケットでは車のナンバー・プレートや調理器具など様々な金属製品のジャックを身に纏い、裏ジャケットではジャックを積み上げた倉庫のような場所をバックにして全裸で膝を抱えている。顔立ちは若き日のジャンヌ・モローのようにきりりとしていて、なかなかの美形。

ちなみにインナー・スリーブも含めて、笑顔を浮かべている写真は一枚もない。本誌編集長ならずとも、ジャケット買いの衝動を抑えられないアルバムである。無論、僕も、何の予備知識もないまま、輸入盤を購入した一人だ。

フェルナンダは、リオ・デジャネイロを拠点に活動しているアーティスト。80年代前半はブリッツというロック・バンドのバック・ヴォーカリスト兼ダンサーとして活躍。この本邦デビュー作は、通算3作目にあたるという。

J・G・巴拉ードや日野啓三も興味を抱きそうな、まさに「未来世紀ブラジル」といったイメージのジャケットから思い浮かべたのは、ピョークやナターシャ・アトラス、グレイス・ジョーンズといった欧米の女性アーティストだが、まんざら外れでもない。というのも、②③④⑥⑦⑩はブラジルのビル・ラズウェルというよりネリー・フーパーと言うべきリミーニャの制作曲。また、①⑤⑧⑨はソウルIIソウルのウィル・モワットのプロデュースで、欧米のファンクやヒップホップ、クラブ・サウンドの要素もたつぷり取り入れられている。

写真から受けるイメージそのままに、フェルナンダのヴォーカルは体温がやや低めで、終始クールな表情を崩さない。グレイス・ジョーンズほどサイボーグ的ではないが、グレイシー柔術の美人格闘家といった感じだ。リミーニャは、そんな彼女の硬質なキャラクターをジャングルの要素を織り込んだり③、スクラッチを挿入したり⑦として、よりいっそう際立たせている。

ただし、ジルベルト・ジル&カエターノ・ヴェローゾのアルバムで行なっていたエキセントリックなサンプリング・コラーージュは見受けられない。その分、下世話な親しみやすさはあるものの、刺激に欠けるといった印象は否めない。ウィルの制作曲は、なおさら無難な仕上がりが。とはいえ、このようなアルバムがブラジルで制作されているという事実は、えらく興味をかきたてる。極度のインフレによってモノの価値がまたたく間に下落するブラジル。だから「ブラジル人には、過去を振り返る余裕なんてない」と語ってくれたのは、マリーザ・モンチである。だからだろうか、リミーニャのプロデュース作品の一部やアドリアーナ・カルカニョートのアルバムは、ある種のラテン・アメリカ文学のように妙に近未来的であり、そこでは過去と未来が挟まれて奇妙な時間軸が成立している。

近い将来、地球の裏側から欧米の時空を歪ませるような新しいポップ・ミュージックが生まれるのだろうか。その答えを知りたい。渡辺章